

## 論文の要旨

本論文は、ことばの使用を相互行為の一面と捉える言語観に立ち、いくつかの特定の言語表現を取り上げ、それらの表現が相互行為において参加者の立場が変化するなかでどのように用いられているかを、実際の談話データを分析することを通して明らかにすることを目指したものである。

第1章の序章では、言語学や社会学において相互行為の研究がどのように行われてきたかを概観し、本研究の立場を明らかにする。本稿では相互行為におけることばの使用について、参加者の立場と言語表現の関係性に注目し、相互行為の状況において、参加者が関係性を切り結びしていく中で、ことばが重要な役割を担うものであることを明らかにすることを旨とする立場をとることを確認する。

第2章、第3章、第4章では、ほぼ独占的な発話権を所有する語り手によるモノローグ的発話を分析対象とした。

まず、第2章では、結婚披露宴の司会者が新郎新婦のことに言及する際に用いられる尊敬語と謙譲語の使い分けについて分析する。司会者の談話を分析すると、ある特定の聞き手に向けて発せられた発話では尊敬語のみが用いられていたが、特定の相手ではなく聴衆全体に向けて発せられた発話では尊敬語と謙譲語が使い分けられていた。これは、聴衆全体に向けた発話では、語り手が自由に視点を移動させることが容易になるためだと考えられる。そのような状況では、司会者は、新郎新婦の行為を列席者に対する感謝の気持ちを伝えるものとして描くときには謙譲語を用い、新郎新婦のことを主役として祝福するときには尊敬語を使用する。司会者が尊敬語と謙譲語を使い分けることによって、描写する事柄に異なる意味づけを行い、披露宴の進行を様々に演出していることを明らかにする。

第3章では、結婚披露宴の司会者が他者に何らかの動作をとるよう促す際に多用する「～テイタダキマショウ」について分析を行う。「～テイタダキマショウ」は相手の行為について述べる際、強要的ニュアンスを帯びる形式だといわれる。いっぽうで、敬語や授受の表現を用いて敬意や恩恵を示すことで、配慮を表す側面もある。また、聞き手が複数いる場面において、一部の聞き手だけが動作主となる「～テイタダキマショウ」は、動作主となる聞き手に対しては行為遂行を促す発話となり、それ以外の聞き手に対しては動作主による行為をともに受け入れようと呼びかける発話となることがある。結婚披露宴では、他者の行為遂行を含む進行管理全般について強い権限を持つ司会者が、相手にとって負担が少ない行為、実行するのが当然性の高い行為を遂行することを促す際に、相手に配慮を示しつつ、他の参加者との共感関係を築く場面で「～テイタダキマショウ」が選択されることを明らかにする。

第4章では、政治家の選挙演説を分析対象とし、引用部分の直後に引用マーカーや伝達動詞が付かず、いったん切れた後で次のことばが続く「ゼロ型引用表現」について分析を行う。ゼロ型引用表現は、他者の発言内容を客観的に報告することが求められるような状

況において使用すると相手に違和感を与えてしまう表現であるが、他者の発話を、聞き手に向けて投げ出すような際に用いられる表現である。選挙演説では他者のことばを題目として取りたててそのことばに対する評価を述べ、他者のことばに対する評価を聞き手と共有しようとする際や、他者のことばを臨場感豊かに描き、聞き手を物語の世界に引きこむような際に用いられることを明らかにする。

後半の第5章、第6章、第7章では、より複雑な相互行為の様相を明らかにするため、立命館大学大学院言語教育情報研究科にて作成された二つのコーパス、「立命館日本語会話コーパス」・「立命館日本語学習者会話コーパス」の両コーパスを用い、2名の参加者による、自由会話に近い雑談を分析対象とする。

第5章では、母語話者同士の雑談における「～ヨネ」の機能を分析する。「～ヨネ」にはさまざまな用法があるが、雑談場面では、話し手が有する不確実な情報を聞き手に照合して確定させるという、確認の用法ではあまり用いられなかった。それよりも、話者が相手に語らせるために自身が知っている相手に関する情報を確認しながら提示する際や、相手が語るストーリーを共感的に解釈して、代弁・先取りしたりする際に「～ヨネ」が多用される。一般的に「聞き手」とされる情報を受容する立場の会話参加者も、会話の構築の中で重要な役割を担っている様子が確認された。「～ヨネ」の発話は、単に情報を伝えるためだけでなく、共同して会話を構築していこうという動機で用いられることが多く、共感的にやりとりを構築していく共話的な状況では「～ヨネ」を用いた発話が重要な役割を担っていることを明らかにする。

第6章では、日本語母語話者と日本語学習者という異文化接触場面の雑談における「～ヨネ」の機能を分析する。母語場面では、二人の参加者の「～ヨネ」の用例数は大きく変わらないのに対して、接触場面では、日本語学習者は日本語母語話者と比較して「～ヨネ」の使用が少ない。また、母語話者は相手の話を引き出す際や、相手の語りに共感を示す際、日本の社会や文化について解説する際に「～ヨネ」を多用していたのに対して、学習者は自分の知識に確信が持てない際に、「～ヨネ」を用いて母語話者に確認しながら話を進めるケースが多い。つまり、母語話者は相手に語らせるため、あるいは相手とともに語るための発話に「～ヨネ」を用いることが多いが、学習者は自分が語るための発話にのみ「～ヨネ」を用いていることを明らかにする。

第7章では、接触場面における相手の発話を補完する発話について分析する。母語場面においては相手の言おうとすることを予測して述べる「共感型」の補完の発話のみがみられたのに対して、接触場面では相手の問い掛けが終わらないうちに先取りして返答する「応答型」の補完の発話もみられた。共感型の補完の発話は母語場面においても接触場面においても用いられていたが、相手との共通の経験や考え・心情などを述べる際に用いられるタイプのものは、母語話者による用例のみがみられ、学習者の用例には相手の言いたいことが理解できていることを示す際に用いられるタイプのもののみがみられた。このような補完の発話を用いて、母語場面においても接触場面においても、参加者はそれぞれの

立場によって、異なるタイプの補完の発話を行いながら、二人の参加者がいずれも談話の構築に大きな役割を果たしていることを明らかにした。

第8章の結論では、ここまでの内容を踏まえ、聴衆に向けて語るモノログにおいても、複数の話者が共同で談話を構築するダイアログにおいても、わたしたちが刻々と変化する状況に応じてことばを使い分け、相手との関係性を築き上げたり、変容させたりしていることを改めて指摘し、まとめとする。